

2. 西南戦争遺跡

豊岡台地北部や田原坂本道周辺は大きな改変は受けておらず、旧状を比較的良好に残している。現在の田原坂は長さ約1,160 m、道幅約4 m、標高は一ノ坂口25.9 m、三ノ坂上の崇烈碑付近106.9 mで比高は81 mである。田原坂が通る豊岡台地一帯は、地理的環境によって歴史的環境が出現した、地理と歴史が密接不可分の関係にあることを明確に示す場所である。

a. 遺構

(1) 確認された遺構

戦場全体からみれば調査地は少ないが、第V章現地調査の成果で報告したとおり、各種の調査や分析を通じて戦いや陣地の状況が見えてきた。田原坂調査地で遺構が確認されたのは、熊野座神社調査地（以下調査地は略す）の陣地状遺構、本道二ノ坂の溝状凹部（塹壕跡）、谷村計介碑の溝状凹部（塹壕跡、交通壕跡）、田原坂公園北半部の溝状遺構（塹壕跡、交通壕跡）と塹壕跡、土坑（仮埋葬場）、砲弾片着弾跡、同南半部の9 T段畑の畔土手、舟底遺跡第6次調査の道路状遺構である。

熊野座神社の陣地状遺構は直線土手と半円形土手があり、銃眼状に一部低い部分もある。遺物は少ないが、立地的には良い場所にある。神社境内地なので取り壊しを免れたのかもしれない。塹壕跡は多く、遺物の採集・出土も多い。基本的に塹壕跡は旧来の溝状凹部（おそらくは中世遺構）を掘削改変して塹壕に利用したもの一本道二ノ坂溝状凹部、谷村計介碑溝状凹部、田原坂公園北半部5 T 6 T塹壕跡が多いが、新たに掘削したと思われる公園北半部1号・2号溝状遺構もある。再利用は底面が平坦で掘削工具痕があり幅が広く、新規掘削は幅に広狭があり壁面凹凸が目立つなどの特徴がある。いずれも応急的なつくりで、古写真に写る塹壕陣地と似ている。

ただ、文献のいう「直ニ地ヲ鑿テ横隧（横穴）ヲ爲シ」「悉ク穴居ノ状ヲナシ」の状況とは異なるようだ。それらの陣地は「坂上正面の賊壘の如き、大抵能く地形に応じて築き」「堡壘ヲ其要衝ニ築キ、碁布星羅互ニ犄角ノ勢ヲ成シ」と、碁盤や星空のように数多く並べて連ねて築かれ、互いに連携して戦うと記されているが、現地調査では、文献記述のような具体的な陣地状況は明確には把握できなかった。今後の調査に期待したい。なお、戦後の遺構としては、公園北半部の土取場跡がある。

(2) 銃砲弾からみた薩摩軍の陣地配置（第2図）

田原坂戦は使用推定銃砲弾数約548万発で、調査で確認した砲弾片と小銃弾は小片を含めて3,500点強である。わずか0.07%、1/1,500に過ぎない。この微々たる数字から田原坂の戦いを検討するには躊躇する。また、調査地の改変程度によっても、数値は大きく変動する。しかし、今後の糧とするため、各調査地の成果と傾向をもとに薩摩軍の陣地配置の検討を進めたい。

戦地の数値化、客観化の一環として、一覧表を作成した。単位面積当たりの銃弾数と砲弾数を算出し均質化して相対的に他所と比較することで、どこに陣地があったのか、どこが激戦地だったのかを推定しようとするものである。表は田原坂各調査地の小銃弾と大砲弾の採集出土数と10 m×10 mの100 m²あたり密度を算出したもので、出土量が少ない調査地は省略した。

小銃弾の採集出土数が多いのは順に本道二ノ坂、熊野座神社、公園北半部、田原城跡・寺跡、北平古道で、密度が高いのは公園南半部9 T段畑、熊野座神社杉木、本道二ノ坂集中部である。他はその1割程度かそれ以下である。採集出土数が多い場所は戦後の土地改変がない場所で、改変がある耕地や公園は少ない傾向がある。これからみると、本道二ノ坂、熊野座神社、公園北半部の3カ所が土地改変が少なく、採集出土数と密度が大きい場所で、次いで谷村計介碑、市有地（北）、田原城跡・寺跡が続く。

大砲弾の採集出土数が多い調査地は熊野座神社、公園北半部、市有地（北）、本道二ノ坂、みかん小屋で、密度では公園南半部9 T段畑、熊野座神社杉木が高く、市有地（北）・（南）、熊野座神社、公園北半部が続く。これからみると、熊野座神社、公園北半部、市有地（北）・（南）の3カ所が採集出土数と密度が大きい場

所である。また、政府軍と薩摩軍の火砲攻撃力の差は、今回調査では明確には把握できなかった。

小銃弾と大砲弾の採集出土が多い場所が盛んに攻撃を受けていた場所であろうから、その場所には薩摩軍の主要陣地が存在した可能性が高い。熊野座神社、市有地（北）・（南）、公園北半部の3カ所の調査地がそれで、政府軍砲台の砲撃範囲に入っている。このような検討と立地地形からみて、陣地規模を大中小の3つに分けて配置推定図を作成した。（本道二ノ坂調査地は政府軍陣地と推定されるので除く）

消失陣地、埋没陣地 これらの数字や遺構から、削平などによる消失陣地や埋没陣地も推定できる。熊本市有地（北）・（南）の東側平坦地、田原坂公園北半部の崇烈碑付近、同南半部の「西南役戦没者慰霊之碑」と熊本市田原坂西南戦争資料館付近である。

熊本市有地（北）・（南）東側は削平地で、周辺地形や古地図からみるともとは南に伸びる痩せ尾根状地形の高所だったようで、田原坂本道と北平古道から続く脇往還が合流分岐する場所に面し、古写真に写る「松下家の弾痕土蔵」が所在した場所である。本道向かいには田原坂公園北半部があり、北と南から連携して街道口を圧迫閉塞していたことが推定される。

公園北半部崇烈碑付近は建碑工事によって削平盛土されていたが、本来は小高く東西に細長い地形で西の二俣台地に対峙した陣地だろう。街道口閉塞の点や分岐尾根が合する高所立地、聞き取り調査での遺構遺物、周辺の出張陣地などからみて最重要陣地の可能性が高く、田原坂の戦いにおける薩摩軍「本丸」陣地だったのかもしれない。このため、戦後にこの場所に崇烈碑が建立されたのだろう。

公園南半部は公園化が進み当時の地形を知ることが難しいが、大きな改変は行われていないので推察はできる。ここは二俣台地に向かって正面で、敵方がよく視認できる反面、敵方にも自身の陣地をさらすことになり攻撃の対象となる。左手南には激戦地の一つ「長窪山」があり、9 T 段畑の埋没陣地はそれに連なる陣地の一つだったと思われる。

b. 文 献

(1) 戦死者数からみた田原坂の戦い

現地調査では知ることが困難な戦死者数から、戦いの実態を探る。日付戦闘地別の部隊数戦死者数の表では、戦闘地を豊岡台地北部と南部に大きく分け、従軍部隊数と主地点の戦死者数と政府軍消費スナイドル銃弾数を記した。

政府軍資料は第七章文献調査第25・26・27表を主に使用し、薩摩軍資料は友野春久「西南戦争薩摩戦没者一覧（一～四）」『敬天愛人』第32～35号を使用した。同資料では全8,333名中戦没地判明は4,076名48.9%、うち熊本2,635名で、戦没地判明中では64.6%が熊本戦死である。

田原坂調査地における小銃弾と砲弾の出土採集数の密度

調査地	100 m ² 当たり点数		調査面積 (m ²)	出土数 (点)	
	小銃弾	砲弾		小銃弾	砲弾
北平古道	2.65	0.03	8,000.00	212	2
田原城跡・田原寺跡	3.24	0.06	7,000.00	227	4
熊野座神社	8.83	0.99	8,000.00	706	79
杉木	(94.72)	(4.51)	(22.17)	(21)	(1)
みかん小屋周辺	2.91	0.21	4,700.00	137	10
本道二ノ坂	14.95	0.13	10,041.00	1,501	13
集中部	(78.31)	(0.55)	(544.00)	(426)	(3)
集中部以外	(11.32)	(0.11)	(9,497.00)	(1,075)	(10)
谷村計介碑	16.50	0.13	800.00	132	1
熊本市有地（北）	13.46	1.22	1,226.00	165	14
熊本市有地（南）	2.72	1.09	368.14	10	4
田原坂公園北半部	3.64	0.60	7,196.54	262	43
田原坂公園南半部	0.14	0.02	5,078.81	7	1
9Tの段畑	(100.00)	(20.00)	(5.00)	(5)	(1)
資料館下	2.00	0.67	150.00	3	1
岡林遺跡	0.04	0.00	9,795.00	4	0
合計			62,350.49	3,366	172
平均 (岡林遺跡・公園南半部 及び集中部など除)	6.38	0.33	52,560.49		

参考

玉東町横平山	5.48	0.05	8,680.00	476	4
玉東町半高山・吉次峠	2.83	0.15	47,200.00	1,337	73
西集中部	(14.77)	(0.90)	(3,000)	(443)	(27)
東集中部	(20.15)	(1.48)	(2,700)	(544)	(40)

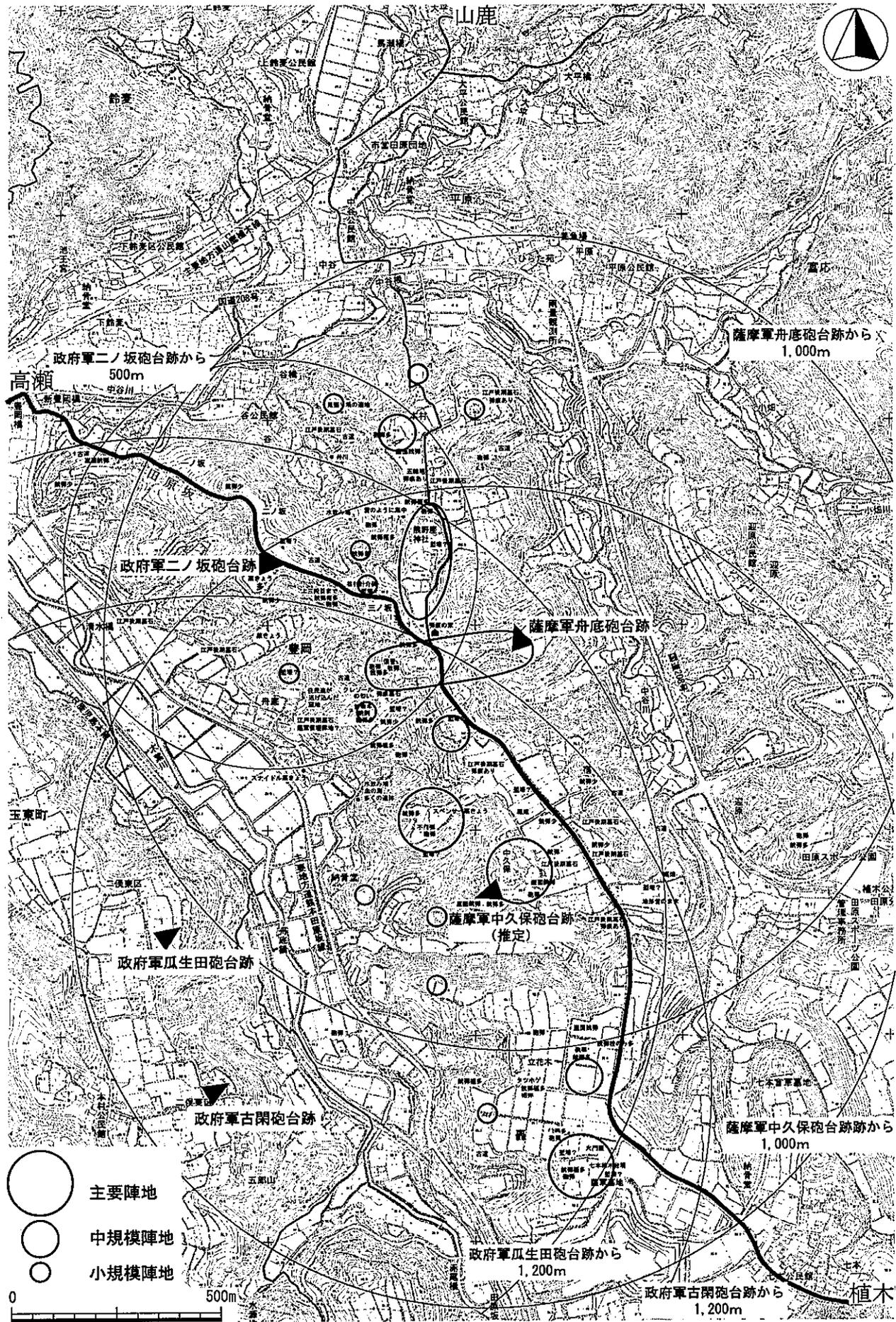
註・小銃弾数は全種類の小銃弾で小片も含む。未使用弾は除く。

・砲弾数は信管・筒翼・霰弾子も含む。

・玉東町分は2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』

玉東町教育委員会をもとに作成。

・（ ）は内数



第2図 各砲台からの攻撃範囲と豊岡台地における薩摩軍の推定陣地配置 (縮尺任意)

考
察

部隊数からは従軍兵員の概数が判明し、戦死者数との比較で戦闘程度と規模が推定できる。政府軍中隊と薩摩軍小隊はほぼ同規模数である。動員兵力では政府軍は日によって差があつて終盤の17日以降急増し、薩摩軍は中盤14日頃に増加するものの大きな変動はない。攻撃側と守備側の違いなのだろう。

政府軍の戦死者は豊岡台地北部の田原口、田原坂では3月7日137名を筆頭に戦死者が0の日はなく、間断なく戦死者が出続けている。南部の二俣・二俣口では8日49名から急増し、14日157名を筆頭に後半が多くなり、終盤では北部と数が逆転するようになる。スナイドル銃弾消費量は田原口では初戦から多く消費され、14日頃には45万発に達している。二俣・二俣口では6日から増え始め、すぐに田原口と多寡が逆転し中盤には大差となる。

薩摩軍は地名表記が政府軍と同一か否かの検証が不十分で、戦没日戦没地不明も多く、示した戦死者数が総数ではないことにも留意が必要である。判明中では北部に多く、特に田原坂での戦死者は絶える日がない。初戦から戦死者は多いが11日に急増し、14日、15日、18日に多い。一方、南部の戦死者は少なく、政府軍戦死者が最多の14日でも不明である。こうした不整合の検討を進める必要がある。

以上からみて、田原坂の戦いでは、当初は北部の田原坂本道方面の戦闘であつたのが、すぐに南部も戦場になり、後半では南部が主戦場になったことが、両軍の部隊数、戦死者数から考えられる。大きな画期は14日で、この日から政府軍戦死者数、銃弾数、薩摩軍小隊数が多くなる。政府軍では終盤には初戦の3倍以上の中隊が投入される。これに伴い、銃弾消費数も増え1日50、60万発の多きに至つたようだ。これらは文献記述と一致し、現地調査の採集出土銃砲弾の具体的理解につながると考えられる。

(2) 文献にみる田原坂本道周辺の地形と薩摩軍の陣地状況

古今、田原坂一帯の地形は多くの書物に記されてきた。大仰な表現もみられ、『西南記傳』にも形容が度に過ぎ実際とは異なるとの記述があるものの、内容は地形の特徴をよく表し薩摩軍の陣地状況も知れる

日付、戦闘地別の部隊数、戦死者数

戦 闘 地 等	政府軍								薩摩軍						政府軍消費銃弾数			政府軍 総攻撃	
	中 隊 数	主戦闘地別戦死者数							小 隊 数	主戦闘地別戦死者数					(本 街 道) 田 原 口	二 俣 口	計		
		北部			南部					北部			南部						
		田 原 坂	田 原	豊 岡 村	七 本	轟 村	二 俣 口 ・ 二 俣	計		田 原 坂	田 原	豊 岡 村	七 本	轟 村					二 俣 口 ・ 二 俣
4	13	30	4	1		4	39	24	14	6					20	86,000		86,000	1次
5	7	4		1		15	20	14	1					3	4	128,000		128,000	
6	19	65	5	1		8	79	18	17	9				1	27	110,500	63,000	173,500	2次
7	23	137	15			4	156	20	10	4	1				15	81,000	106,000	187,000	3次
8	23	35	7			49	91	17	11	8		1			20	50,000	63,000	113,000	
9	21	50	12			16	78	18	21	3					24	50,880	119,600	170,480	
10	7							16	4	3					7	23,000	38,000	61,000	
11	23	45	9			49	103	22	49	15		2			66	12,000	186,100	198,100	4次
12	11							18	22	7					29	50,000	203,000	253,000	
13	9	7	5			12	24	22	10	6					16		40,000	40,000	
14	18	13	1		6	157	177	33	42	12			1		55	450,000			抜刀隊
15	8	17	7			35	59	32	37	10		11		6	64				
16	17							24	12	1					13				
17	31	56	5		2	40	104	24	16	4				1	21				5次
18	35	16			8	75	99	25	36	10		2			48				
19	2							20	6			1			7				
20	35	36	12		2	1	84	23	17	9		3			29	平均 322,150 発 × 17 日間 =			6次
計	302	511	82	3	18	1	548	1,163	370	325	107	1	20	1	11	465	5,476,550 発		

考察

ので、一部改変して引用する。

『征討軍團記事』 第二回田原坂險 明治 13 年

田原坂ノ險要ナル阪道隧ノ如ク、羊腹崎嶇、兵略上守ルニ便ニシテ、攻ムルニ難キノ地勢タリ。我軍劇戰晝夜少シモ間斷ナキモ、毎ニ此地形ノ爲ニ阻礙セラレ遺憾ニ堪ヘザル者ナリ。(中略) 堅壘ヲ兩崖十數所ニ築ケリ。其壘タルヤ、尋常胸壁ノ比ニ非ズ。直ニ地ヲ鑿テ横隧ヲ爲シ、我進路ヲ遮斷シ、賊ハ悉ク穴居ノ状ヲナシ、以テ固守力戰ス。(中略) 故ニ全役ヲ終ルマテ其死傷ノ尤夥キハ、田原ロナリトス。

『征西戦記稿』 卷六田原坂戦記三月四日 明治 20 年

田原坂ノ地タルヤ外昂ク内低ク、恰モ凹字形ヲ成シ、坂勢峻急加ルニ一陟一降ノ曲折ヲ以テシ、坂ノ左右ハ斷崖峭壁ニシテ茂樹灌木之ヲ蔽ヒ、鬱蒼トシテ晝昏ク、詢ニ天陰ト爲ス。賊堡壘ヲ其要衝ニ築キ、碁布星羅互ニ犄角ノ勢ヲ成シ、死ヲ以テ之ヲ扼ス。

『西南記傳』 第三章田原方面の戦闘ニ薩軍の配備 明治 42 年

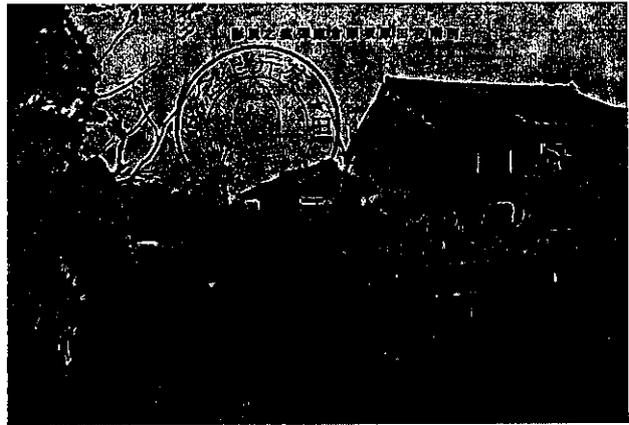
田原は玉名郡の低地より山本郡の高地に至る坂路にして、必ずしも斷巖絶壁の要隘あるに非ず、險阻重閉の控扼あるに非ずと雖ども、守るに便にして攻むるに難き地勢たり。坂上は田疇の中に在りて薩軍之に據り、天險を補ふに人工を以てし、堡壘碁布、随意に十字火を用ゆべく、而も其構造たる何れも強硬斷面に於て、巨砲も之を碎くこと能はず。加ふるに、將士一心、死を決して之を守り、縱令全軍塵滅に至るとも、尺寸を退かざらんことを期するものゝ如し。

『西南記傳』 同 山県有朋参軍の田原坂地勢視察

田原坂の險たるや兩崖皆高くして街道は凹状を成し、坂を登て折るゝ数箇所、愈よ登て愈よ險なり。而して賊は此兩崖に拠り、或は壘を樹木鬱蒼の間に設け、或は壁を岩石嵯峨の際に築き、所謂一夫之を守れば三軍も行くべからざる地勢たり。



薩摩軍陣地の状況 (『従征日記』3月20日より引用)



田原坂旅行記念絵ハガキ
(脇往還と松道家彈痕土藁、手前は田原坂本道)



稲藁土藁と墓石の陣地 (植木陣山付近)



稲藁土藁の陣地 (植木滴水)

資料4：中隊兵員減員表

資料4

政府軍中隊兵員減員表(田原坂総括報告書464頁～465頁に対応)

部隊(中隊長名) (部隊)は田原坂の戦いに参戦、 小計には含まれない	中隊人数	戦死者数(名)				差引数	3/31時点 兵員数 『従征日記』	4/5部署配置 兵員数 『征西戦記稿』	4/6部署配置 兵員数 『従征日記』
		3/3 まで	3/4～ 3/20	計	戦死率 (%)				
近歩1連1大1中(村田少尉)	203	9	45	54	26.6	149	50	62	62
近歩1連1大2中(山崎少尉試補)	203	5	35	40	19.7	163	63	70	70(1連2大2中)
近歩1連1大3中	203	4	47	51	25.1	152	83		
近歩1連1大4中(大谷少尉)	203	1	28	29	14.3	174	101	80	80
近歩1連2大1中(細井少尉試補)	199	15	15	30	15.1	169	63	40	40(1連1大1中)
近歩1連2大2中(山縣中尉)	199	6	36	42	21.1	157	101	88	88
近歩1連2大3中(伴大尉)	199	12	25	37	18.6	162	79	48	48(1連3大3中)
近歩1連2大4中(大久保大尉)	199	5	31	36	18.1	163	64	80	80
近歩1連2大	—		1	1	—	—			
近歩1連	—		1	1	—	—			
(近歩1連3大3中(志道少尉試補))	?							49	49
近歩2連1大1中	186		48	48	25.8	138			
近歩2連1大2中(粕屋大尉)	183		18	18	9.8	165	116	52	112
(近歩2連1大4中(乃木少尉))	(192)							61	61
(近歩2連2大1中(長屋少尉))	(192)							191	127(2連3大3中)
近歩2連2大2中(杉中尉)	192		17	17	8.9	175	66	60	60
(近歩2連2大3中)	(192)						131		
近歩2連2大4中	192		8	8	4.2	184	62		
近工1大1小	166		2	2	1.2	164	95		
近砲1大1分隊							56		
小計	2,527	57	357	414	16.4	2,113	1,130	881	877
(東鎮1連1大1中(木下中尉))	(213)						109	104	104
(東鎮1連1大2中(原大尉))	(213)						170	159	159
東鎮1連1大3中(齋藤大尉)	213		8	8	3.8	205	158	152	152
東鎮1連1大4中(福原大尉)	213		9	9	4.2	204	138	136	136
東鎮1連3大1中(渡邊中尉)	156	8	21	29	18.6	127	59	36	36
東鎮1連3大2中(鱸少尉)	156	9	15	24	15.4	132	70	56	56
東鎮1連3大3中	156	8	35	43	27.6	113	72		
東鎮1連3大4中(青山益幸中尉)	156		17	17	10.9	139	71	57	57
〃									71
(東鎮2連1大1中(飯田俊助中尉))	(135)						119	92	92
東鎮3連3大2中	181		33	33	18.2	148		48	
(東鎮3連3大3中(花岡中尉))	(181)						106	80	80
(東鎮3連3大4中(梶原中尉))	(181)						173	141	143
東鎮豫砲1大(1小以外)	84	1	1	2	2.4	82			
東鎮豫砲1大1小	121		3	3	2.5	118	148		
東鎮豫砲3大1小	48		1	1	2.1	47			
東鎮工1大2小	145		10	10	6.9	135			
東鎮工1大							134		
東鎮輜重1小							62		
東鎮騎1大	?		2	2			24		
小計	1,629	26	155	181	11.1	1,448	1,613	1,061	1,086

資料4

部隊(中隊長名) (部隊)は田原坂の戦い不参戦、 小計には含まれない	中隊人数	戦死者数(名)				差引数	3/31時点 兵員数 (『従征日記』)	4/5部署配置 兵員数 (『征西戦記稿』)	4/6部署配置 兵員数 (『従征日記』)
		3/3 まで	3/4~ 3/20	計	戦死率 (%)				
(名鎮6連1大4中(筑山中尉))	(172)							90	90
(名鎮6連1大)							116		
(名鎮6連3大4中(北川大尉))	(163)							140	140
小計	—	—	—	—	—	—	116	230	230
大鎮8連2大1中(河越大尉)	154	2	19	21	13.6	133		50	50
大鎮8連2大2中(宮崎中尉)	154	5	5	10	6.5	144		61	61
大鎮8連2大3中(天野大尉)	154	2	14	16	10.4	138		40	40
大鎮8連2大4中(羽山少尉)	154	1	8	9	5.8	145	55	55	55
大鎮8連3大1中	167		3	3	1.8	164	125		125
大鎮8連3大2中(都筑中尉)	167		53	53	31.7	114	65	50	50
大鎮8連3大3中	167	1	39	40	24.0	127	106		106
大鎮8連3大4中(高木少尉)	167		53	53	31.7	114	46	30	30
大鎮9連1大1中(和智中尉)	172	1	26	27	15.7	145	90	90	90
大鎮9連1大2中(伊津野中尉)	172		47	47	27.3	125	71	40	40
大鎮9連1大3中(松本少尉)	172		27	27	15.7	145	107	108	108
大鎮9連1大4中(伊藤中尉)	172		12	12	7.0	160	130	130	130
大鎮9連2大1中(山中中尉)	160	1	11	12	7.5	148	123	123	123
大鎮9連2大2中	160		48	48	30.0	112	54		
大鎮9連2大3中(友安大尉)	160		36	36	22.5	124	87	87	87
大鎮9連2大4中(御座中尉)	160		36	36	22.5	124	66	67	67
大鎮9連2大	—		3	3	—				
大鎮9連3大2中(田中少尉)	171		16	16	9.4	155	84	42	42
大鎮10連1大1中	149		11	11	7.4	138			
大鎮10連2大1中	171		36	36	21.1	135	46	35	
大鎮10連2大2中(石黒少尉)	171		40	40	23.4	131	66	50	50
大鎮10連2大3中(大久保大尉)	171		25	25	14.6	146	71	40	40
大鎮10連2大4中(山田中尉)	171		19	19	11.1	152	111	50	50
大鎮10連2大	—		1	1	—				
(大鎮10連3大2中(水野大尉))	(168)						103		50
大鎮砲4大1小	147		3	3	2.0	144	137		
大鎮砲4大2小	136		1	1	0.7	135			
大鎮豫砲2大2小	118		5	5	4.2	113			
大鎮工2大(1小)	83		2	2	2.4	81			
大鎮工2大2中(2小か)	160		1	1	0.6	159			
大鎮工2大							108		
大鎮輜重2小							42		
小計	4,260	13	600	613	14.4	3,647	1,893	1,148	1,394
広鎮11連1大3中	178		1	1	0.6	177			
(広鎮11連2大2中(横井中尉))	(171)							50	50(11連3大3中)
広鎮11連2大3中	189		36	36	19.0	153	79		
広鎮11連2大4中(徳本中尉)	189		10	10	5.3	179	116	80	80
広鎮11連2大	—		2	2	—				
広鎮11連3大1中(奥田中尉)	174		13	13	7.5	161	106	70	70
広鎮11連3大3中(玉置少尉)	173		37	37	21.4	136	61	40	40
広鎮11連3大4中(田邊少尉)	169		16	16	9.5	153	90	60	60
(広鎮12連2大1中(山田貞久大尉))	(167)							161	
小計	1,072	0	115	115	10.7	957	452	461	300

部隊(中隊長名) (部隊)は田原坂の戦い不参戦、 小計には含まれない	中隊人数	戦死者数(名)				差引数	3/31時点 兵員数 『従征日記』	4/5部署配置 兵員数 『征西戦記稿』	4/6部署配置 兵員数 『従征日記』
		3/3 まで	3/4~ 3/20	計	戦死率 (%)				
熊鎮13連1大2中	153	4	1	5	3.3	148			
熊鎮13連3大3中	159	12	1	13	8.2	146			
熊鎮13連3大4中	158		2	2	1.3	156			
熊鎮14連	—	1		1	—				
熊鎮14連1大1中	168	12	1	13	7.7	155	137		
(熊鎮14連1大2中)	(167)	(27)		(27)	(16.2)	74			
(熊鎮14連1大3中)	(167)					90			
(熊鎮14連1大4中)	(166)					79			
熊鎮14連2大	—	1		1	—				
(熊鎮14連2大1中(佐藤中尉))	(163)						70	70	
熊鎮14連2大2中(古志少尉)	165	14	22	36	21.8	129	29	29	
熊鎮14連2大3中(高井大尉)	167	10	6	16	9.6	151	62	60	
熊鎮14連2大4中(佐藤少尉)	164	12	28	40	24.4	124	40	40	
熊鎮14連3大	—	1		1	—				
熊鎮14連3大1中(小見山透少尉)	164	5	12	17	10.4	147	80	80	
熊鎮14連3大2中(西島中尉)	167	5	15	20	12.0	147	112	93(4連3大2中)	
熊鎮14連3大3中(高橋中尉)	160	8	3	11	6.9	149	88	60	
熊鎮14連3大4中(唐橋在雅少尉)	168	13	4	17	10.1	151	70	88	
小計	1,793	98	95	193	10.8	1,600	730	520	
計	11,281	194	1,322	1,516	13.4	9,765	5,934	4,303	

部隊(中隊長名は4/6時点) (部隊)は田原坂の戦い不参戦 (小計には含まれない)	中隊人数	戦死者数(名)				差引数	3/31時点 兵員数 『従征日記』	4/5部署配置 兵員数 『征西戦記稿』	4/6部署配置 兵員数 『従征日記』
		3/3 まで	3/4~ 3/20	計	戦死率 (%)				
警視局	—	10	55	65	—	—			
警視隊(後軍に属す)	—				—	—			
教導団歩2大3中	—		1	1	—	—			
輜重部	—	1	7	8	—	—			
その他(旧侍命非職)	—	1		1	—	—			
小計	—	12	63	75	—	—			
工兵(本軍に属す)							70		
工兵(後軍に属す)							90		
小計	—	—	—	—	—	—	160	—	
合計	11,281	206	1,385	1,591	14.1	9,765	5,934	4,463	

※・3/3までの戦死者数は、『靖国神社忠魂史西南の役』から抽出した。

・砲工兵で予備隊がある場合は、その小隊の人数に合算した。

・中隊人数は、「旅団編成表」『征西戦記稿附録』、熊本鎮台は、「諸隊人名表(明治10年2月調)」『熊本鎮台戦闘日記二』から抽出した。また、大隊数のみ記載があるものは案分した。

・4/5の部署配置兵員数は、『征西戦記稿』の当該日記述を基に作成した。

・中隊長名は『征西戦記稿』4/5部署配置表を基に作成し、空欄があるものは記載がないものである。

・4/6の部署配置兵員数は、『従征日記』の当該日記述を基に作成した。()は、連隊・大隊・中隊長名が違っているものである。

参考・歩兵大隊臨時編制(明治10年5月29日) (『征西戦記稿附録』附録34・35頁)を基に作成

30名=1個分隊、長=伍長

60名=1個半隊=2個分隊、長=軍曹

120名=1個小隊=2個半隊、長=少尉

240名=1個中隊=2個小隊、長=大尉・中尉

1,000名=1個大隊=4個中隊、長=少佐

3,000名=1個連隊=3個大隊、長=大佐・中佐

6,000名=1個鎮台=2個連隊

資料4

資料4

『新編西南戦史』—「田原坂附近の戦闘」の政府軍(近衛、鎮台、警視隊他)戦死傷者数

日付	戦死傷者数	3/3までの戦死者数	吉次・木葉・原倉等の戦死者数	戦死者数計	推定戦傷者数	備考
3/3まで	—	206	45 (3/3のみ)	251	—	
小計	—	206	45	251	—	

日付	戦死傷者数		総括報告書の田原坂方面戦死者数		吉次・木葉・原倉等の戦死者数		戦死者数計		推定戦傷者数		備考
	人数	累計	人数	累計	人数	人数	累計	人数	累計		
3/4	180	180	46	46	54	100	100	80	80	野津支隊	
3/5	56	236	20	66	5	25	125	31	111		
3/6	99	335	80	146	2	82	207	17	128		
3/7	259	594	161	307	1	162	369	97	225		
3/8	151	745	92	399		92	461	59	284		
3/9	182	927	78	477	8	86	547	96	380		
3/10	休戦	927	115	592		116	663	57	437		
3/11	173	1,100			1						
3/12	61	1,161	27	619	5	32	695	29	466		
3/13	記載なし	1,161									
3/14	321	1,482	177	796	2	179	874	142	608	開戦以来最大の激戦	
3/15	224	1,706	248	1,044	2	250	1,124	-26	582	警視抜刀隊の被害多く精銳は殆どいなくなった	
3/16	休戦	1,706	107	1,151		109	1,233	115	697		
3/17	224	1,930			2					高瀬病院の患者が2,000人に達す	
3/18	173	2,103	99	1,250		99	1,332	74	771		
3/19	休戦	2,103	135	1,385		136	1,468	359	1,130		
3/20	495	2,598			1					行方不明者59人を含む	
小計	2,598		1,385		83	1,468		1,130			
合計	(2,598)		1,591		128	1,719		(1,130)			

※・吉次・木葉・原倉等の戦死者数は、『田原坂総括報告書』の第26・27表にある地名以外であり、『歴史のはざまに』を基に作成した。

・3/12と3/18の戦死傷者数については、『新編西南戦史』に記載がないので、『征西戦記稿上』の当該日記述の死傷者表を基に作成した。

警視隊『西南戦闘日注並附録二』における戦死傷者数

[肥後国熊本方面(熊本城籠城戦)]379頁～

日付	戦死者数	戦傷者数	計	日付	戦死者数	戦傷者数	計
2/22	1	16	17	3/22	0	1	1
2/23	2	5	7	3/27	18	33	51
2/27	6	2	8	3/29	0	1	1
3/1	1	0	1	4/5	0	2	2
3/3	0	1	1	4/8	6	5	11
3/6	0	1	1	4/14	0	3	3
3/7	1	1	2	合計	63	129	192
3/12	16	39	55	2/27 千草小学校の偵察戦			
3/13	11	17	28	3/12・13 段山の戦い			
3/16	1	1	2	3/27 京町口の出撃			
3/17	0	1	1	4/8 侵襲隊			

[肥後国植木方面(田原坂の戦いから熊本城開城まで)]391頁～

日付	戦死者数	戦傷者数	計	日付	戦死者数	戦傷者数	計
3/14	10	16	26	4/1	0	4	4
3/15	13	39	52	4/2	—	—	—
3/16	—	—	—	4/3	—	—	—
3/17	4	17	21	4/4	—	—	—
3/18	2	5	7	4/5	—	—	—
3/19	—	—	—	4/6	11	34	45
3/20	12	10	22	4/7	—	—	—
小計	41	87	128	4/8	2	5	7
3/21	—	—	—	4/9	—	—	—
3/22	—	—	—	4/10	0	1	1
3/23	9	32	41	4/11	0	2	2
3/24	0	9	9	4/12	0	2	2
3/25	3	16	19	4/13	1	1	2
3/26	2	8	10	4/14	0	3	3
3/27	—	—	—	小計	14	52	66
3/28	5	10	15	合計	74	215	289
3/29	—	—	—	3/14 警視抜刀隊の初戦 七本柿木台場の戦い			
3/30	0	1	1	3/15 半高山の戦い			
3/31	—	—	—	3/17 田原坂の戦い 第5次総攻撃 抜刀隊二俣口の戦い			
小計	19	76	95	3/20 田原坂の戦い 第6次総攻撃 田原坂陥落			
				3/23～26,28 第2次田原坂戦 向坂、木留、吉次、轟方面			
				4/6,8 荻迫・木留の戦い			

資料4

薩摩軍 田原坂方面部隊配備状況

部隊名	小隊長名	配備状況	備考
薩1大6小	相良 吉之助	七本(3/4、6、10~13、16~20、長窪山(3/5)、轟村(3/7、9)、田原(3/8)、七本柿木台場(3/14、15)	相良3/5戦死→廣瀬喜左衛門3/11戦死→山野田一輔
薩1大7小	森岡 長左衛門	田原坂左翼(七本、轟方面)(3/4)、田原(3/6)、七本柿木台場(3/14)	森岡3/14戦死
薩1大8小	谷元 良介	田原(3/4~6)、七本(右半隊3/16)、田原坂本道(右半隊3/20)	
薩2大1小	松永 清之丞	田原(3/7、9~16、18、19)、北之手松山台場(3/8、17)、轟村(半隊3/9)、田原坂本道(3/20)	
薩2大2小	中島 健彦	田原(3/7~12、14~20)、轟村(半隊3/9、半隊13、14、15、18)、田原坂本道(左半隊3/13)	
薩2大6小	川村 甫介	豊岡村(3/9)、田原(3/10~20)、七本(3/18)	川村3/20戦死
薩2大7小	武 郷兵衛	田原(3/6)、田原坂本道(3/7)	
薩2大9小	伊集院 権右衛門	田原坂左翼(七本、轟方面)(3/4)、田原(3/6)	
薩3大3小	高城 七之丞	七本柿木台場(3/18)	
薩3大4小	山下 喜衛	七本(3/11)、轟村(3/13~20)	
薩3大7小	岩切 喜次郎	七本(分隊3/11)	
薩4大5小	永山 休二	長窪山(3/5)	永山3/11戦死→河野喜八郎3/15戦死
薩4大6小	松下 助四郎	轟村(3/4~12)、七本(3/11)、田原(3/15)	
薩4大7小	石原 市郎右衛門	北之手松山台場(3/4、17)、田原本道右翼(3/4)、田原(3/4~6、8~16、18、19)、田原坂本道(3/7、20)	石原戦死
薩4大10小		二俣口(3/18)	
薩5大1小	河野 主一郎	田原本道右翼(3/4)、田原(3/6)、田原坂本道(3/20)	
薩5大3小	神宮司 助左衛門	七本(3/11)	
薩5大4小	長崎 尚五郎	七本(3/11、13、16~20)、田原(3/12)、七本柿木台場(3/14、15)	長崎3/17戦死
薩5大5小	菌田 武一	田原本道右翼(3/4、左半隊3/5、13)、田原(3/4、6~19)、田原坂本道(3/5、20)、田原坂上(左半隊3/14)	
薩5大8小	石橋 清八	熊野座神社(宮山)(3/4、7)、田原(3/4、6)、田原本道右翼(3/5)、北之手松山台場(3/5~8)、田原坂本道(3/7)	
薩5大9小	国分 寿助	田原坂左翼(七本、轟方面)(3/4)	国分2/25負傷→萩原宗蔵
薩6大1小	鮫島 敬輔	豊岡本村背後山中(3/4)	
薩6大2小	池田 静治	田原(3/4)、七本(3/4~7、9~13、16~19)、七本柿木台場(3/14、15)、田原坂本道(3/20)	
薩6大3小	竹下 莊之進	豊岡本村背後山中(3/4)	
薩6大4小	前田 軍左衛門	豊岡本村背後山中(3/4)、田原(3/4~8)、豊岡村(3/9)	

部隊名	小隊長名	配備状況	備考
薩6大5小	水間 勘助	田原坂左翼(七本、轟方面)(3/4)、田原(3/6)	
薩6大6小	竹下 仙左衛門	田原(3/4~8、10~20)、豊岡村(3/9)	
薩6大7小	宇都宮 良左衛門	田原(3/4~20)	宇都宮2/22戦死→柚木彦 四郎3/10戦死→谷山喜助
薩7大3小	瀬戸山 良知	七本(3/7、11、16~18)、田原(3/8~10、12~14、19、20)、七本柿木台場 (3/15)	
薩7大4小	岩元 太郎	七本柿木台場(3/14、15)、七本(3/18)	
薩7大6小	林 一郎	田原口(3/17)、田原坂本道(3/20)	
薩7大9小	本田 元瑞	七本(3/11)、七本柿木台場(3/14、15)	
薩7大10小	小城 宗一郎	七本(3/7、16~18)、田原(3/8~14、19、20)、七本柿木台場(3/14、15)	
薩7大11小	山内 孝左衛門	七本(3/4~6、8~13、16~20)、田原(3/6)、田原坂本道(3/7)、七本柿 木台場(3/14、15)	
貴島1小	能勢 十九郎	七本(3/13、16~20)、七本柿木台場(3/14、15)	
貴島2小	折田 敬介	田原(3/13、15~20)、七本柿木台場(3/14、15)	折田3/15戦死→徳永次兵 衛3/18戦死
貴島3小		七本柿木台場(3/14、15)	
貴島4小	新納 清一郎	七本柿木台場(3/14、15)	
貴島5小	柚木崎 正因	七本柿木台場(3/14、15)	
貴島付属砲隊		七本柿木台場(3/14、15)	
佐土原1小	村田 正宣	七本(3/4~13、16~20)、七本柿木台場(3/14、15)	
佐土原2小	鶴田 六郎	七本(3/4~13、16~20)、七本柿木台場(3/14、15)	
高鍋1小	石井 習吉	七本(3/13、16~20)、七本柿木台場(3/14、15)	石井3/5戦死→廣瀬喜左 衛門3/11戦死→山野田一 輔
高鍋2小	内田 武夫	七本(3/13、16~20)、七本柿木台場(3/14、15)	内田3/14戦死
熊本1小	佐々 友房	田原(3/13)、七本柿木台場(半隊3/14・15)、七本(右半隊3/16)	
熊本3小	城 市郎	七本(3/4、7~13、16、17)、七本柿木台場(3/14、15)	
熊本7小	北村 盛純	七本(3/4、7、9、11、12、16)、七本柿木台場(3/14)	
熊本9小	深野 一三	七本(3/4)、七本柿木台場(半隊3/14・15)	
熊本10小	遠坂 関内	七本(3/4、7、17、18)、七本柿木台場(3/14、15)	
熊本11小	原田 十次郎	七本柿木台場(3/14、15)、七本(3/18)	原田3/16戦死
熊本12小	大矢野 次郎八	七本(3/17)	

『薩南血涙史』(大正元(1912)年加治木常樹)にみる薩摩軍の兵員減員状況

3月14日

此時、七本の山野田(一輔)隊(1番大隊6番小隊)及び山内孝左衛門(7番大隊11番小隊)、瀬戸山良知(7番大隊3番小隊)、小城宗一郎(7番大隊10番小隊)は、日夜の戦闘激烈にして殺傷相踵き各隊を合して数10名に減少し、1塁4、5名を配して守備するに至りしが、此日暁天より官軍攻撃し劇戦、時を移せしに弾薬全く竭きたるを以て、遂に白刃を揮って斫入し、敵40名を斬り多くの銃器弾薬を得たり。(219、220頁)

3月15日

横平山は(中略)官軍守戦中、第一の要地なり。故に官軍一たび之を失えば田原、二俣保つ可からず、連日の苦戦も画餅に帰せんとす。是に於て官軍急に前夜の部署を改め全力を盡し横平山を恢復せんと欲し、第11連隊の2個中隊、第1連隊の2個中隊、第8連隊の1個中隊、第14連隊の2個中隊及び警視隊の抜刀隊を漸次山下に集中せり。

薩軍は山上茂林密樹の間に隠れ官軍の仰攻を拒ぐ。此時、萩原隊(5番大隊9番小隊)の半隊左翼より突進し戦い最も烈し、官軍披靡して進み得ず、時に官軍1士官あり、別隊を指揮し奮戦して激しく迫る。薩軍狙撃して悉く之を殲す、官軍狼狽走り逃るもの僅かに6、7名なり。官軍又兵を増し右翼より来り攻む。是に於て戦闘益々激烈を極め山鳴り谷響き、其聲百雷の如し。両軍互殺死屍を以て壘を築くに至る。(222、223頁)

3月16日

此日の戦い、第5番大隊4番小隊長長崎直(尚)五郎以下数名之に死し、高鍋隊分隊長平島重綱、押伍薬師寺松次郎以下数10名之に負傷し、瀬戸山隊(7番大隊3番小隊)は1隊5名に減ぜり。官軍は月岡中尉以下死傷するもの211名に及べり。(228、229頁)

3月18日

岩元太郎(7番大隊4番小隊長)は部下30余人を率い、川村(甫介)隊(2番大隊6番小隊)と共に七本口山野田隊と交代すべしとの令を受け此地に来りしが、戦い酣なるを以て直に戦線に入り激戦せしに、部下殆んど全滅に至らんとす。是に於て、岩元慨然として半隊長柿元軍平を顧みて曰く「部下の同志已に全滅せり。我等独り生存するに忍びず、共に敵中に斫入して死せんには」と語終って兩人敵中に斫入し、岩元は丸に中りて死し、柿元は銃創を受けて斃れ、遂に敵の為に擒となれり。官軍、其壮烈なりしを感じ高瀬に送りて治療せしも、遂に重創の為に死し、官軍之を大覚寺に葬しという。

山野田隊は連戦18日間、1隊20余名に減じ、瀬戸山隊は5名に減じ、山内隊、小城隊亦数名に減じたるを以て、川村甫介、岩元太郎の諸隊と交代し植木に引揚て休兵し、4小隊を合して1隊となれり。(232、233頁)

3月19日

薩軍は此時に当り死傷相踵き、1隊に士官なく或いは全滅に至るものあり。且つ東西応援便ならざるを以て此日小隊の制を廃して中隊となし、中隊長及び左右小隊長、半隊長、分隊長を置き、各隊より選抜して之に任じ、又は数隊を合併して1中隊となし、翌日を以て之を各隊に発表せり。(234頁)

『従征日記』巻一 川口武定著 明治十一年刊

三月四日 曇 午後雨降る 田原坂の戦、初戦

この日、我兵は田原坂上にいる薩摩軍に向かって台地の下から攻撃し、敵の第一陣地を落として一斉に坂を登り、左右の迂回兵もまた登った。しかし、薩摩軍は堅牢な陣地を坂の上の高所に築き、我が兵を見下ろして攻撃し、峻険な地に拠つて防戦している。

我兵は仰攻するも、田原坂は地形の険しい自然の要害であるので、進む者は必ず傷つき、退く者は必ず斃れる。午後三時になつてもなお、これを抜くことはできない。時に雨は激しく降り、進撃は極めて苦しんだ。

野津少将は機を察し、諸隊長に命じて進撃のラップを吹かせた。正面と左右の三兵はすぐに相応じ、突貫突撃して薩摩軍の陣地に迫る。敵はますます火力を猛烈にして、近づく者を狙撃した。弾が当たらない者はいない。そのため我兵の死傷は特に甚だしく、兵の士気が少し挫けた。野津少将は兵を叱咤激励し、自ら防塁の外に立つて諸将を指揮した。

薩摩軍はこれを知ると、いつとき、弾丸を大雨のように発射した。私は野津少将が負傷することを恐れ、曾山軍吏たちと一緒に少将のところに行き、共にその袖を引っ張り、あるいは前を遮り防塁内に戻らせようとした。こうしたことは七、八回にも及んだ。

野津少将の自身の命もかえりみず、大義を重んじる姿は実に深く感動するところであるが、もし、悪敵どものために少将の身に万が一のことでもあれば、いくら悔やんでも悔やみきれない。私はどうしても止めなければならないのだ。日没間近になつても、ついに戦功をあげることはできず、戦いをやめて守備を嚴重にした。

本日は非常な激戦だったので、消費弾薬は数十万発の多くに及んだ。はじめ、この日の消費量を概算して五、六万発とみたが、結果的にはこのように多数の弾薬が必要になり、一時混乱したが、担当官の尽力によつて少しも滞留することはなかつた。ただ、草鞋の欠乏にはおおいに苦しんだ。

三月五日 雨

この日、大規模な進撃はなかつたものの、砲撃は互いに猛烈で、多くの死傷者が出た。薩摩軍の勢いはますます強烈で、わが軍は力闘するも非常に苦戦している。

この時、天気は大雨で盆を傾けるように激しく降り、道路は泥土が深くぬかるんで滑り、兵士たちは皆、泥鰯の漁師のように全身が泥まみれだった。

三月六日 晴れ

明け方、兵を配置し進軍して薩摩軍を攻撃する。薩兵はひとときわ強く、互いに死傷者が出る。終日戦い、片時も砲撃が絶えることはない。しかし、一步も進むことができなかった。日はすでに沈み、戦いを中断する。

これより前、支軍は高瀬から進んで、原倉を経て吉次峠に向つたが、薩摩勢は猛威を

振るい死にもの狂いで峠を守るので、我軍は大敗し、江田少佐たちは戦死した。我が軍士卒の死傷者は甚だ多い。敵將、篠原国幹を倒したのもこの戦いである。

ここにおいて、野津大佐、長谷川中佐たちは、吉次峠が容易に抜けないさまを目の当たりにし、本軍本営に來た。支軍兵を本軍と合わせて兵力を増強し押し返そうとし、本軍は支軍の七個中隊と砲兵工兵若干が追加されて、二十個隊になった。

弾薬は第一予備が不足する時は第二予備から廻し、第二予備が不足する時は南関砲廠に請求し、常に二、三十万発の弾薬が貯蓄できるよう充塞させた。

三月七日 晴れ

薩摩軍は田原坂本道の高所の險に拠り、地形をうまく利用して防戦し、下から攻める仰攻では我が軍には利がないことから軍議を開き、兵卒を左のように配置した。

前駆 歩兵三個中隊

遊軍 歩兵六個中隊

右 田原坂の右翼より進撃する

遊軍 歩兵五個中隊

右 田原坂を防守する

予備 歩兵一個中隊半

右のように兵卒を配置して田原坂の本道は特に厳守させ、仮本営を二俣村に置き、この日夜明けを待たずに進撃して敵の左翼側面を突いた。敵は支えられず敗れて退却。我兵は追撃して敵陣を抜き、ますます火力を猛烈に攻撃した。

ここに、一大難事がある。薩摩抜刀隊である。薩摩軍はややもすれば、かわるがわるに抜刀していつせいに鬨の声を上げて呐喊突入して斬り込んでくる。その様は飄忽として軽く素早く、突如襲ってくる嵐のようだ。

我兵は銃に着剣してこれを防ぐが、支えることができずいつもその兇峰に敗れ去る。敵は度々遠くまで行かずに自陣に拠る。我が兵はまた前進し砲撃は猛烈を極め、再びその陣壘を落とせば、敵はまた抜刀して突入し、またその防壘は奪いかえされる。一取一奪。このようなことが数回繰り返された。日はすでに没し、おさえた壘を守備して兵を収めた。

これより前の三日間は、敵は極めて盛んに大砲を発射した。しかし、今日のような激戦の時に一発の砲弾も発射しないところをみると、砲弾が欠乏しているようだ。我が軍は三門の山砲を二俣台場に設置し、敵壘や営舎を射撃する。

三月八日 晴れ

二俣口から攻撃する。兵の配置は前日と同じ。薩兵はまた抜刀の毒手を盛んにして、しばしば我が兵を力すくで退ける。そのため突進することができない。これに加えて激戦は連日続き昼夜も間断なく絶え間がない。兵卒たちは疲労困憊、この日もまた敵壘を落とすことはできなかつた。ついに日は沈み、守備を嚴重にして戦いをやめる。

本営は毎朝長官たちが出発したあと、必ず諸品を梱包整理し、命令が出たらすぐに転移できるように準備し、夕刻になるとこれを解いて夕食の用意をする。このようなことが数日続いた。しかし、敵勢は衰えず、日に一勝一敗、一歩進めばまた一歩退き、前進することがないまま、ついにまた整理しなくなってしまった。

私は野田軍更正と同じく戦場に臨み、各課を巡視して小纏帯所をつくる。この日は死傷者が非常に多く、後ろの家に入ると、十五、六体の死体が互いに重なり合つてムシロの上であり、コモやワラツトをその上に被せている。その血は顔面や手足、あるいは衣服や武器にべつとりと付着して、色は赤黒く変わっている。魚市場に並んだマグロのようで、無残な状態は悲しく辛く見るに堪えない。なのに、傷者を少し手当し大纏帯所に送ると、傷者がまた来る。このように傷者は続々とやってくる。医官たちは一服する暇もない。

三月九日 雨

曾山軍吏が目撃したことを聞くと、我が軍は一個大隊を右翼から大きく迂回させて敵を挟撃して大いに破り、ついに一つの堅塁を抜いたとのことであった。

しかし、この日は訳あつて、進軍することはできなかった。わずかに四、五百メートル離れた場所で野営した。

参謀部の益満邦介中尉は普段は探偵諜報活動を担当しているが、この日は一個中隊を率いて先に進み、突撃して敵塁に迫った。薩兵は決死防戦したが支えきれず、ついに陣塁三か所を奪取した。

薩摩兵には狙撃手がいて、我が士官とみると必ず連発して射撃する。ために我軍の士官は斃れるものが非常に多い。よつて軍議を開き、士官にはみな下士官の外套を着させ、略帽をかぶらせて兵を指揮させた。

三月十日 晴れ。午後ときどき雨

各兵隊は連日の戦闘で非常に疲労しているので、この日は各々の持ち場で兵を休養させた。

私は木葉の大纏帯所を訪れ近くで実際の状況を見ると、戦傷者が多く溢れ、医官は応急処置を施し、患者を運ぶ台はひつきりなしに門を出入りし途切れることはない。私は三浦煥軍医正に会つて状況を尋ねたところ、死傷者は一日平均百七、八十名に達するとのことだった。負傷者たちはみな十分な治療を受けることができない。ただ出血を止め、銃弾を取り出し、あるいは刀傷を縫合し、あるいは骨折に副木をあてるのみで、他のことを行う余裕がない。かつ、薬は甘硝石精と火酒の二品にすぎない。多忙の極みなのでやむを得ないが、非常に不憫である。

三月十一日 快晴

明け方、我が軍は左の部隊を動員して攻撃を始めた。

田原口 歩兵三個中隊
 援隊 歩兵一個中隊
 植木口 歩兵三個中隊
 援隊 歩兵一個中隊
 迂回隊 歩兵二個中隊
 第一分遣 歩兵二個中隊
 第二分遣 歩兵二個中隊
 休兵 歩兵五個中隊

本街道は従前どおり

薩摩兵の勢いは極めて盛んで、発砲も猛烈。このため、我兵は一步も進むことができず、ただ守線内で対戦するばかりである。四斤山砲二門を二股村の右丘に配置し、時々発射した。

三月十二日 曇り晴れ定まらず

一俣方面は進撃せず、各守備線内から発砲挑戦するのみ。ほぼ、休戦と同じ。

この日、吉次峠の敵四、五十名が原倉方面に向かい侵入した。我が兵はこれを撃ち、しりぞけた。

三月十三日 くもり

この日もまた激戦せず。各自の守備線内で警備を厳重にした。近日は兵力を休養させており、大いに何か計画されているようだ。しかし、休戦の間も四方の砲声が絶えることはない。

我兵はここ数日の連戦に激しく疲れ、嫌気がさし、聞くと壘内にいて銃撃する時に、おもわず昏睡する者もいるという。さらには、敵が近づいてきたのもわからないまま、殺された者もいたという。まさに心身ともに疲労は極限まで達し、心身衰弱、疲労困憊が甚だしく、死の恐怖すら忘れるほどに至っている。

埋葬地は木葉の字高月原に設けた。はじめは死者がとても少なかったので、上木葉村の正念寺境内に埋葬した。しかし、日を追うごとに戦死者は増え、埋葬する場所がなくなったので高月原に設けた。その後、戦死者は日に日に増え続け、屍は積み重なって山のようなになった。そのわきを通る兵卒にこの状態を見せれば、おそらくは肝を冷やし士気が下がる恐れがある。よつて、病院課に命じて竹垣を墓地の周囲に廻らせ、これらを隠した。

三月十四日 晴れ 警視抜刀隊の初陣

本日の進撃の部署は左のとおり。

戦列隊 戦列隊ならびに援隊は従前部署のとおり
 攻撃隊 歩兵二個中隊

応援隊 歩兵二個中隊

抜刀隊は三隊に分かれて左右と中央から突進し、敵星を突破したら戦列隊が前進してその星を占拠する。進軍号音は応援隊から各隊に伝達する。

右の部署で明け方から進撃する。敵は不意を突かれて狼狽し、守星を捨てて逃げ出そうとしていた。我が兵は砲撃をやめ、銃剣を着し叫び声をあげながらこれを追撃した。巡査は刀を振るい歩兵とともに進んで追い打ちをかけ、ついに敵星三か所を制圧した。

敵は死体を捨てて逃げ、あるいは田原坂の守兵に合流し、あるいは坂の凹道に潜んで我々を射撃した。敵勢は猛烈。我が兵は追撃をやめ、砲戦がしばらく続いた。

午後になって、敵の勢力はますます激しくなり一挙に侵入してきた。我が兵は占領した守線を捨てて一時退却したが、再び回戦し、ついに進んでその守線を取り戻し、嚴重に警戒して戦闘を止めた。

この日、はじめて警視抜刀隊を用いて敵に応戦した。

以前、敵はたびたび抜刀隊で我が兵を苦しめたが、この日は我が抜刀隊に敗北した。もし抜刀隊の戦力が同等になれば、我兵におおいに有利になるだろう。

敵星の築造はよく兵法にかなっており、その星の多くは溝を星前面に掘ってその中に先のとがった木杭を列にして立てていた。我が兵が進撃する際にこれに落ち、負傷する者もいたという。

この日、我が軍は敵星を抜き守線を進めたので、前日の戦死者を収めたいと思い、森本軍吏補と四元書記を軍夫数名とともに戦地に向かわせた。戦闘がまだなお激しいため、すべての戦死者を収めることができない。弾丸の下をくぐりながら、なんとか百四名の戦死者を集めた。しかし、皆七、八日間雨露にうたれ、炎天下に野晒しにされていたので、腐敗は激しく、ある者の体は白のように膨れ、その臭気は特にひどい。

敵の死体も三体あったので小丘に埋葬しようとして、軍夫に担がせたところ、我が兵卒がこれを見て、切齒扼腕、怒りに震え銃剣でその死体を刺し、あるいは乱斬りし、またあるいはその肉を切り裂いて食らおうとした。森本軍吏補たちは、やつとのことでこれを抑えたという。

患者台は帆布で作られたものだが、患者が多すぎて全員には給せられない。そのため、代用品として竹で患者台を作り大綱帯所に送った。急場の一時しのぎである。

三月十五日 晴れ 横平山の戦い

前日の戦列隊から三個中隊を抜き、他の隊と合せて戦列隊とする。

諸隊は、午前五時に集合し六時に出発しようとしていた、その矢先、敵軍はすでに我が二俣本営の後方横平山に迂回し、突如襲撃して来た。勢焰は猛烈で、我が守備隊はこれを迎え撃つもかなわない。一旦、その場を捨てて撤退した。

我が軍は前の部隊配置を変更し、すぐに援軍を出しその陣地を取り戻した。敵はまた兵を増やしてこれを奪う。我が兵は奮戦しまた取り戻す。このような奪取と奪還が何度も

繰り返され、ついに敵に占領されてしまった。敵はますます兵気を奮い立たせ、まさに我が本營に突入しようとする勢いである。

時はすでに午後五時、ちょうど巡査が八十名余り来た。野津鎮雄長官は巡査たちに

「敵軍は山星に拠つて我々を射撃している。今、抜刀隊で側面から吶喊して斬り込めば、敵兵を皆殺しにするのも難しくはない。諸君にこれができるか。銃戦ならば歩兵がいるので、諸君らは必要ない。我が隊に入ることを禁じる。」

と告げると、巡査たちは皆大いに奮い立つて

「承知した」

と答えた。そして巡査たちをひそかに山に登らせ戦線外に伏し、少しずつ進んで敵星に近づかせた。その距離が約七、八十メートルの近さになるのを待ってラツパを鳴らし発砲を止め、五分の間に全員が銃剣を着し一斉突撃し、進軍ラツパと共に敵星に斬り込んだ。敵は顔面蒼白うろたえ混乱し、一人も刃向かう者はなく、死体を越えて逃げ走る。

我が兵は銃剣をきらめかせ、あるいは白刃を振るつて追撃した。ちょうど、夕日は西山に傾きその斜光がたくさん銃剣や白刃にあたってキラキラと輝き、その様はまるで千本の電光がいつんに放たれたようだったという。

この夜、敵は暗闇に乗じて、我が本營の側にある那智や轟から続く谷を潜行し、抜刀隊を三手に分け、一手は前面の立花木哨兵線右翼の側面から、一手は背面から一斉に斬り込み、また百余名が正面から押し入った。我が兵は敵を三面に受け、逃れる道はなく皆命がけで防戦した。たまたま、その守兵は前日に交代したばかりの新兵だったので、敵の抜刀隊に恐れ慄いて大混乱に陥り、味方兵の銃剣で負傷し、士官に斬られ、甚だしいのは逃走の際に溝に飛び降り、同じ隊の兵の銃剣に貫かれて死ぬ者もいたという。

援兵が来て何とか奮戦激闘の末、やつと敵を退けた。薩摩方の戦死者もまた百余名は下らないだろう。中国の故事『憤兵は敗る』とは、こうしたことをいうのだろうか。

三月十六日 晴れ

この日、各守備線の警備を嚴重にして攻撃はしなかった。ただ、哨兵は銃を放つて警戒を強めたと聞いた。

最近、戦死者の収容数は二百七十名の多くにいたつた。おそらく埋葬地の土質が堅く、一畝もたやすく入らないので、徐々に累積してそのような状態になつたのだろう。軍夫七十名で昼夜問わず埋葬したが、休む間もなかつたため、病院課の竹内軍吏補を専任としてこれを監督し、急いで埋葬させることにした。

たまたま私もまたそこに行つてそれを視察すると、戦死体は乱雑に置かれ、数枚の田畑は足の踏み場もない。古史にいう「積屍草を為す」死体が積み重なつて丘となる、とはそれが虚文でも誇張でもないことを知つた。

三月十七日 晴れ

この日は一時二俣口への進撃を止め、本街道の田原坂を攻略しようと兵を配置し、明け方に進めて敵壘に迫った。

薩兵は常に四、五名の哨兵を壘の中に置き、また展望兵を各高所に配布して監視し、少数の兵を予備隊として後方の窪地や地物に拠って守らせている。政府軍兵を見つけると、展望兵は藁に火をつけて巨煙ののろしを上げ、予備兵はこれを見てすぐに前進して壘内に入り防備を厳にする。その進退出没の行動は実に巧みである。

本日も我兵が本道から不意に進撃しても、薩兵はすぐにのろしを上げて予備兵につなぎ、壘兵を増して必死に防戦した。そのため、終日力攻したがついに攻略できなかつた。自陣に戻り、守備を厳にして兵を収めた。

この日、二俣方面はただ専守防衛を主としていたが、逆に激戦になった。ひとたびは進みひとたびは退き、ある時は勝ちある時は負け、そうして少しだけ陣地を進めることができた。しかし、田原坂上の電信柱までは、達することができなかつた。

三月十八日 晴れ

この日もまた互いに守備線を警戒し、攻撃はしなかつた。しかし、午後になると突如戦闘が始まり、急遽敵陣を攻撃した。敵はよく死守し、ついに抜くことはできなかつた。

この時、東京鎮台兵十四、五名は飛弾の下を潜進して敵壘に迫り、その下に匍匐し、隙を窺って突入しようとした。敵は死力を尽くして砲撃をしばらく続けたが、敵は我兵に援兵が續かないのを見て、ひそかに兵士を壘の左右に回し、一斉に我兵の両側面を射撃した。我兵は退路を失い、ついに壘下に重なり合つて戦死した。それでもなお、小銃は手放さず、みな前を向き敵壘を枕に討ち死にした。

我兵が奮進する際、これに継ぐ援兵の有無は勝敗に直結する。我が将校が好機を誤らず、速やかに援兵を出していれば、むなしく勇敢な兵を失うことなく敵壘を抜くことができたのに。嗚呼。

私は木葉の高月原にある埋葬地を巡視した。四元書記たちが大いに力を尽くし、既に七百名あまりの遺体を埋葬し、状況は非常に整然としている。四元書記たちの説明を聞くと、埋葬にはひと苦勞があるようで、政府軍兵と薩摩軍兵の区別がつかない者が多く、軍服を剥ぎとられて下着だけの者や、あるいは丸裸で一枚の布も纏っていない者もいるという。非常に惨憺たる状況だ。

三月十九日 晴れたり曇ったり

休戦

川崎副監督から書簡が来た。それによると、

「高月原の埋葬地は軍人が往来する道端にあり、大いに軍の士気に関わる。そのため、速やかに改葬すべきである。」とあつた。

現在のところ既に高月原にはおよそ七百名以上が埋葬されている。今これを掘り起こし移動させるのは容易ではない。改葬はついに実行されなかった。

見習士官生徒を隊伍に編入し、戦闘に参加させることになった。

三月二十日 雨 午後晴れ

この日の進撃の部署は左のとおり

先駆	歩兵六個中隊
	外に抜刀隊若干名
中軍 (援兵)	歩兵六個中隊
後軍 (予備兵)	歩兵八個中隊
	砲兵一個分隊
	工兵三個小隊

右は午前五時に集合、午前六時に出発

田原坂守兵	歩兵七個中隊
二俣守兵	歩兵十個中隊
	外に抜刀隊三十名
横平山守兵	歩兵六個中隊
輜重運送隊	通計 三百人

右の部隊で午前六時に大雨を押し切つて、濃霧に乗じて突進し、たやすく第一右翼の敵壘を突破した。その時、雲霧はますます濃くなり、敵は全く我々に気付かず、いたずらに別の方に向けて発砲し防戦していた。我軍は素早く奪った敵壘に抛つて、敵側面を連射猛撃した。砲声の數に比例して敵には斃れる者が數十名出て、死者を棄てて逃走した。

その時、すでに空は明るくなり、雲霧はようやく晴れて、雨もまた小降りになった。我兵は敵屍を越えてこれを追撃し、遂に植木に入った。敵は予想外の敗北を喫し、狼狽とくにはなはだしく、植木に蓄えていた食糧や弾薬も全て捨てて逃げた。

はじめ我軍は、

「田原坂の薩兵は死力を尽くして固守する。強引にこれを突破しようとするれば、必ず多くの兵が負傷し、軍機を誤る」と考えていた。

しかし今、少數の兵でこの戦いを制し、別経路から後方の敵も駆逐し、兵力を前面に使わずして後方の敵を既に負かしたことで、わずかに一個分隊数十名の兵でもって刃を血に染めることなくこれを打ち破った。実に望外の奇跡の大勝利である。

その時、私は立花木の壘上に来て、野津、大山の両少尉たちの側にいた。瀬戸口少尉が旗を振りながら走つてきて、

「小官はある隊長と相談し、一個分隊の兵を借りて、田原坂の敵壘の背後に回ろうとしたところ、敵の一人が我々の兵を見てすぐに逃げ出し、仲間のもとに到着すると、他の敵も一斉に壘を捨て、山を登り谷を渡つて敗走しました。」

我兵は一発も弾丸を使うことなく、敵壘に入りました。しかし、前方にいるわが軍の兵はそのことを全く知らずに激しく発砲したので、ラッパを吹いてこちらは友軍であることを示そうとしたが、前方の兵はなおも疑い、射撃を止めませんでした。

私は号旗を振りながら壘に登り、荒々しく大声で友軍であることを示すと、ようやく前方の兵は発砲を止めました。前進して壘に入り、互いに呐喊の声を上げ、また、兵を合わせて敵を山上に追撃しました。」

と報告した。

少将たちはこれを聞いて、両手を挙げ、足をふみならし、腕を強く握り締め、思わず大声を出し、雄叫びをあげた。

我が軍はこの勝利に乗じてこの日すぐに熊本に連絡し、敵地を縦横無尽に蹂躪しようとして進んで植木を過ぎ、またたく間に回坂の険を越え、まさに鹿子木に達しようとした。

その時、薩摩兵は四方の残兵を集め、吉次の守備兵に連絡して、我が軍進路の側面に現れて我々の退路を断ち、三つに分断した。砲撃と射撃はすこぶる猛烈で、また、キエエエーッ！という猿叫を発しながら突撃し、抜刀して斬り込こんできた。薩人の呐喊の声は猿の叫び声に似ているので猿叫と云う。

我が軍は敵が後方に迫るのをみて、みな色を失い逃げようとする。士官たちは剣を振って叱咤し、制止しようとしたが力及ばず、ついに死傷者を棄てて植木へ退却した。

植木には敵の物資と弾薬が蓄えられていた。我々はすでにここに本営を設け、補給物資を運び入れていた。長官たちもまさに移動しようとしていた矢先、わが軍は突然敗走し、植木の地はたちまち敵対する最前線になってしまった。

そこで民家に火を放ち、敵の物資と弾薬を我々の物資とあわせて、同時に全て燃やして灰とした。一旦占拠した地を焦土にすることは、これはいつたい誰の誤りであろうか。惜しいことだ。

はじめ私は今朝の勝利の知らせを聞き、すぐに戦地に行つてこれを確認した。我が軍の砲壘は敵壘と非常に近接しており、その距離はわずか十間十八メートルほどであった。

聞くところによると、我々も敵も連日の長い戦いに疲れ果て、我が兵が巷で流行っている歌を唄えば、敵も合わせて唄う。あるいはあざけり、あるいは罵る。我兵が餅片を投げ

「見ろ、我が軍は兵糧が豊富だ。お前たちは食糧が尽きて間もなく餓え死するだろう。

かわいそうなことだ。餓鬼のお前たちに少し恵んでやろう。」

と、舌戦が絶えなかつたという。

今それを実際の現場でみてはじめて、それが嘘ではないことを知った。無数の敵の屍体が土壘の前後に折り重なって倒れており、また、我兵の屍体も数十体あった。敵はほとんどが銃創を負い、ときどき刀創の者もいた。

その服装は、陸軍旧正服、あるいは海兵服、あるいは旧式の小紋股引で後裾をまくり上げ、あるいは最新のメリヤス編みの莫大小ズボンなどの者もあり、その服装は一様ではない。

我らはこのように敵屍が積み重なっているのを見て、少しばかり積日のうつぶんが晴れた。しかしながら、なかでも四斤破裂弾に当たった者は五体が飛散し、わずかに両足あるいは片足だけが残っている者、あるいは頭が半分ぐちやぐちやに砕けて脳漿が流れ出し、西瓜が熟れて崩れたかのような者、あるいは腹を貫かれて大腸や小腸の内臓が飛び出している者、あるいは筋骨を破り裂かれた者がいる。その情景はまるで獣肉屋の店先のように、まったくもって、筆紙に尽くしがたい。

私ははじめこの様子を見て、まるで彷徨う魂の演劇場の仮想の空間のようで、とても人間の現実世界のこととは思えなかった。わずか一町百メートルあまりの溝側に、屍体が七十八、九体もあり、見るも無残なありさまであった。

捕虜を交換するのは万国共通の法であるが、この戦いで我軍が捕らえた者は皆、国事犯人、国家に対する犯罪者なので裁判官に引き渡し牢獄に入れ、裁判の結果を待つて処分する。敵は我兵を捕らえた時は、木に縛り付け、必ず両手足を切り落とすという。このような残酷なことは、豺狼、つまり山犬や狼のようなむごい人間ですらないことだ。この日、そのような遺体を二体見た。

私はしばらくの間この地に留まって兵食をとり、また木葉町に戻った。この時には田原坂の本道はすでに通行できたので、そこを通った。田原坂上の民家は激しく燃え、敵の兵舎を凹道の各所で見かけた。兵舎内には鍋や飯櫃、食籠があつた。坂上の要地に塁が築かれ、大穴が掘つてあつた。坂の上の電柱や樹木には弾痕が蜂巣のように無数にあり、中央から折れたものもあつた。これだけで、かつての大激戦の証になる。

植木方面は砲声が猛烈で、しかも敵の弾薬庫に火を放つたので、その凄まじい爆発の轟烈音は、まるで百雷が地に落ちたかのように、言い表すことができない。

この夜、轟村から植木の間の凹道にかがり火を焚いて見張り兵を置き、政府軍が大勢いるように見せかけようとした。しかし、この地は長い間戦場だったため薪や柴がない。そこで、くずれた民家一棟を十五円で買い上げ、それを壊して薪材とし、火をつけて凹道一、二町ごと、百か二百メートルごとに燃やさせた。その炎炎とした光は夜中から明け方まで続いた。この策はすべて大山蔵少将が授けたものである。